

こころやの老

涅槃の巻

佛身及佛土……………	一		
涅槃界に對する觀念……………	一		
重ねて佛教の涅槃の觀念……………	四		
涅槃界の異名……………	七		
極樂及佛身……………	九		
涅槃界……………	二四		
密嚴淨土……………	二六		
蓮華藏世界……………	三〇		
涅槃及佛身……………	三三		
		御逸事	
		行誡上人よりの書翰……………	三五
		追慕……………	三六
		(一)……………	三六
		(二)……………	三六
		(三)……………	三三
		(四)……………	三五

佛身及佛土

如來の方より云はゞ、如來自境界、永恒本然の本覺の主體、即ち人の方よりは、宗教終局目的に歸入すべき無爲涅槃界、主體客體全々一致したる處、本覺始覺合體せし處、或は神の國、また天樂園と名けられ、或は清淨國土、自性身寂光土、また自性天真佛、また十佛自境界等の種々の名を以て表明せらる。世界生滅轉變を超えたる、絶對無規定にして、眞實、常住、安樂、自由、清淨の靈界。

また至眞、至善、至美の眞理の靈界、最高等にして眞神の在ます處とも云ふべく、釋迦牟尼佛無上菩提を得て證入し給ひし處、即ち涅槃界なり。一切諸佛は此の實證より出で、一切衆生最終目的として歸する處なり。

涅槃界に對する觀念

一

神及び神の國に對する觀念は、宗教意識の程度に隨つて、神の國即ち涅槃の觀念また階級なき能はず。自然教の如きは、幼稚なる意識なるが故に、神の國の觀念隨つて賤劣なり。自然物素の中に神を求む、未だ自然科学唯物論者器械的世界觀の觀念には、自然以上の高等の神國を要求せず、彼等は自然界に肉の幸福を最終の希望とす。

超自然教には、自然界は生滅轉變極りなし、常住の安穩は得て望むべからず。宗教意識が最終目的として希望する處は、世界を超越したる神の國即ち涅槃界とす。彼處は常住安樂、光榮と幸福に充さるゝ處、或は世界を超越したる天國と云ふ。または西方十萬億土と名づく。此等は生滅の世界と不生滅の涅槃界とを空間的に超然たるものとす。また一方には生死の現世界と、常住の涅槃界とは、方處の彼此に拘はらず、凡夫の迷によりて生死を受く、若し煩惱滅する時は即ちこゝに在りて涅槃を證す。然れども凡夫が生死を滅して涅槃を得んには、無限の時間を超ゆるにあらざれば、三祇劫を超えたる彼處に於て涅槃を證すと。或は時間的に、或は空間的に、生滅の世界と涅槃界神の國とは其體質を異にするものと觀す。

二

高等に進みたる圓教にては、生死即涅槃、煩惱即菩提として、生滅轉變の現世界と不生滅の涅槃界とは、空間的にも時間的にも別々なるものにあらず。娑婆即寂光土にして、本より涅槃界、即ち如來の清淨土は絶對無限にして、何の處か之に出でたる所ぞ。如來の寂光土の中にあつて、凡夫は自ら生死の世界と觀す。衆生の生死の世界を即如來は極樂淨土の無盡の莊嚴と見る。心迷ふ時は生死の世界、悟る時は即涅槃界、如來の絶對無規定の靈界の中に衆生は相待規定の束縛を感ず。極樂は無爲涅槃界、本然清淨にして如來の境なれば、何ぞ方域からん。故に淨土論に、觀彼世界相、勝過三界道、畢竟如虛空、廣大無邊際とあり。然るに經に過十萬億の方域を立つるは暫く隨機説のみ。記主師曰く、方域を立つるは約機説、無方域無邊際とは佛及證者に約しての説なりと。

如來の本土は絶對ならば云何かして現自然界と障礙せざるや。曰く、吾人が經驗せ

三

る自然界は意志に實現せられたる客觀的觀念にして、本質が絶對觀念態なれば、自然現象の自中存在なることを妨げず。故に吾人迷妄の夢醒覺し來つて觀すれば、如來一大觀念中に幻現せる世界なることを觀知す。吾人の經驗せる自然界に、生滅轉變究りなく、本體の觀念界は、常住不變にして一切の約束を受けず。絶對心靈界に萬徳の莊嚴なるは、是高等なる宗教意識が要求する終局目的に歸すべき涅槃界なりとす。

重ねて佛教の涅槃の觀念

宗教の終局目的に歸する處は、意識の程度に隨つて、涅槃界に對する觀念もまた階級的に其を異にす。暫く二三を擧ぐるれば、小乗教の如きは説く、今此身心は苦空無常無我なり、之を厭捨し、無我の觀をもて、煩惱を斷じ、諸の業を止息し、而して我空眞如を證得し、乃至羅漢果を得て、灰身滅智、身心等一切滅したる處に、涅槃界顯現す。此の身心を厭捨し偏眞の無爲に歸するを終局目的とす。

法相家には、世界一切萬物は各自の第八識アラヤ識を以て根本とす。アラヤが變じて、此の身も心も世界も現す。主觀も客觀も同じくアラヤ識の所現にして、識を離れて實我也實法もなし。若し人煩惱所知の二障を斷盡せんが爲めに、三祇の功に萬行を修し、最後の一念に佛果を得る時、八識は轉じて四智となり、二轉妙果、三身圓滿を證す。清淨法界は是自性身を體とし、四智の相は自受用身、四智と不生不滅の清淨法界とを合して、如來五淨三身の相あり。涅槃に本來自性清淨涅槃と有餘と無餘と無住處とあり。

智の故に生死に住せず。大悲の故に涅槃に住せず。常寂にして妙用無碍、未來際を盡して有情を利す。斯教の如きは、生滅の世界と涅槃界とは體性を別とするが故に超然教なり。

圓教にて、天台には土に四土を立て、即ち凡聖同居土、方便化土、眞實報土、常寂光土これにして、前の三土は機類に應じて觀する世界、常寂光土は唯佛の境界、是如

來の自境界、常樂我淨の四徳をもて莊嚴し、寂にして常に照し、理智冥合せる處に如來清淨法身在ます。

本來如來の寂光土の中に在つて、衆生は自ら生死の苦界を觀す。諸佛の菩提を衆生は自ら煩惱として迷惑す。生死轉する時は即ち涅槃、煩惱の自性を知れば即ち菩提の光なり。

華嚴によれば、眞如自性を守らず隨縁して生死の海衆生界に流轉す。生死を出で、因分は普賢境界、重々無盡の理を證し、果分十佛自境界、密迹入玄、成佛涅槃の相、如來自證の境界は證者自ら知るのみ。

華嚴三昧に證入してより、如來の境界は四法界、重々無盡、事々無碍、蓮華藏界所有塵、一々塵々入法界。

密家によれば、全宇宙は大日心王の覺體、塵數の諸聖は心數の眷屬、五智所成の依正二報は本有金剛界。

涅槃界の異名

如來本覺、自性天真、諸佛自境界、また眞如、法性、第一義諦、如來藏性、涅槃、本覺等の名を以て心靈界を表明す。

如來本居の涅槃界は本一體なれども、種々の方面より之を觀じこれを表明するに名詞も從て多種なり。

常寂光土——理智に約す。

極樂——感情に約す、

淨土——感覺に約す。

無爲涅槃——意志に約す。

無量光明土又は智土——智の具象的表明。

自性天真——理性。

密嚴土——神秘的。

蓮華藏界——譬喻的。

神の國涅槃界を或は抽象的又は具體的又感情智力等の諸方面より觀する又多種なり例へば同じ日光に對する感覺に視官には光明態、觸覺には熱態なるが如し。

常寂光土、如來本居自境娑婆に即して即寂光。

不在内、不在外、不在中間、超空間、絕時間、離一切相即一切法、離故無相、即故無不相、即如來本自境、非寂、非照、復寂にして常照、照而恒寂、故名常寂光土、また清淨法身と名づく。身土不二、本始不二。

涅槃界は理想態とし、觀念的に表明して寂光土と名く。永恒本自寂靜にして、虛徹靈明、唯大智慧光明あるのみ。永恒常寂は理性、昭々曜々たるは慧知、心靈の光明即ち清淨法身にして、而も寂光土。故に心身土不二なり。是の如き身土は無始無終、非成非壞、本自永恒自存の心靈態、即ち如來自性なり。

清淨法身居常寂光土とは、即ち身土不二の體なり。是の如きの境界は、佛陀の自ら證入する所、即ち阿彌の自體。一切衆生は無明に翳られて之を見知すること能はず。盲者の日光を見ざるが如し。一大觀念中にある世界たることを知らず。

衆生は但肉眼をもて自然界のみを見る。若し佛眼開く時は此土即常寂土なるを見知すべし。法華に我不見如三界見三界。また如實知三界相とあり。三界とは自然界。如實知見は靈界。一は肉眼所見にして、他は佛眼所照なり。

佛及び證者は娑婆に即して寂光を見る。寂光如來境智を融じ、而も常寂昭々、法身を體とし、應身を用とし、數多無量の化身を發現して衆生を度して無窮、衆生既に成佛する時は本始不二、十方三世諸佛本體を一にし、三身一如、境智不二なるを寂光如來と名く。

極樂及佛身

九

八

寂光土を感情的に表明して極樂世界と名く。又最幸の國とも云ふ。靈界は因果の束縛を離れ、自然の規定を超えたり。生滅轉變の患ひなく、彼我分別の隔てなく、機制我と世界の約束を離れたる心靈の生命は、真我に融合し、無碍自在、永恒不變、眞理に隨順し、法性に相應し、四德莊嚴の國には自然微妙の樂のみあり。無爲涅槃の域には、光榮と幸福とのみ充てり。樂園無爲の春ながく、逍遙極りなき處、歡喜は無限の泉源より湧出し、自然の妙樂は法界と共に盡くることなし。經に彼佛國土は清淨安穩にして微妙快樂なり。無爲泥洹の道に次げり。諸の聲聞菩薩天人智慧高明に神通洞達し咸な同じく一類にして形異なし。餘方に因順するが故に天人の名あり。顏貌端正にして、世に超えて希有、容色微妙にして天に非ず人にあらず、みな自然虛無の身、無極の體をうけたりと。

一極樂はたゞに如來の實體の上に冥合たるのみならず、如來の不可思議の妙用たる所作智・妙智との感應によりて、衆生の心靈と如來の内容と融合し、自然に微妙の快樂を感せしむ、

極樂は如來の内容をすべての心靈に冥合して、感應の中に起す所の妙樂なれば、寂光土は本體を表し、極樂は妙用を表はす。前者は如來の形式理性致一にして、後は内容の融合の状態なり。起信に、如來は本第一義諦なれども、大用をもて衆生の見聞に隨つて種々の快樂莊嚴を起すとは是なり。如來の妙用の所發とし、人の感情的信仰の對象としては、如來の涅槃界を吾人目的の歸處たる極樂界と名づく。

清淨土又は美天國

寂光土即ち極樂を如來所作智の現はす處とし、また衆生の感覺の對象として、淨土又は美天國と名づく。聖典によりて其の相を示さば、如來國土は自然の七寶を以て地と爲す。恢廓曠蕩にして限極すべからず。悉く相雜開し、轉相入開し、光赫焜耀にして、微妙奇麗なり。清淨莊嚴十方一切世界に超躡せり。衆寶の中の精たるものなり。又曰く、一切萬物、嚴淨光麗、形色殊勝に、妙を極め美を盡せり。能く稱量すること

10

11

なし。又曰く、衆寶蓮華世界に周徧せり。一々の寶華に百千億の葉あり。其の花の光明無量難色にして、青色には青光あり、白色には白光あり、玄黄朱紫の光色も亦然り。暉暉煥爛にして明瞭なること日月の如し。一々の華の中より三十六百千億の光を出し、一々に三十六百千億の佛を出す。身紫金にして相好殊特なり。一々の諸佛また百千の光明を放ちて、普く十方の爲めに微妙の法を説き給ふ。是の如き諸佛各無量の衆生を佛の正道に安立せしめ給ふ。

又聖典に、如來其中に於て、六十萬億の身に八萬の相好を具足し給ふを現じて、光明遍く十方の世界を照し、常に念佛の衆生を攝し給ふと。

諸の法身の菩薩は雲の月を籠むが如くに圍繞し、如來相好圓滿の身を現して、爲めに法を説き給ふ。

是の如く感覺的莊嚴の相は、皆是感覺心象にして、肉眼の所對にあらず。本より如來の涅槃界は淨土本來寂光土、何ぞ感覺の相あらん。答へて、如來の大木體本質の方からは唯一大觀念態なるも、大用現象たる成所作智によりて、諸の感覺的莊嚴を現するなり。

藕益師云く、寂光若し勝妙の五塵なくんば、何ぞ夫れ聲聞の偏真に異ならんと。本より淨土の五塵は物質的的感覺にあらずして感覺心象なり。即ち肉眼の對象にあらずして心眼の所照なり。

起信に、諸佛法身色相を離る、云何ぞ、能く色相を現する。

答へて曰く、即此法身是色體なるが故に能く色を現す。所謂本より已來、色心不二なり。色性即智なるを以ての故に、色體無形、説いて智身と名く。智性即色なるを以ての故に、説いて法身、一切處に徧すと名づく。所現の色分齊あることなし。心に隨つて能く十方世界、無量菩薩、無量報身、無量の莊嚴を示す。各々差別皆分齊なく、相妨げず。此心識分別の能く知る所にあらず。眞如自在の用の義なるを以ての故にと。記に、所現の色中に、彼の眞心無碍にして周徧の故に、所現の色亦圓融無碍、乃至

一々諸根皆法界に徧し、然も互に相妨げず、此眞の用、妄識の能く知る所にあらず。宇宙の本體寂光土なるは大圓鏡智の體なり。五塵の妙莊嚴は成所作智の用。如來法身法界に周徧するが故に、作智周徧す。故に一切の處に清淨國土を現す。

涅槃界

如來の清淨土を涅槃界と云ふ。

如來の境界は相待因果生滅の規定を離れ、絶對無規定、本有の實相の體は造作のえとする處にあらず。

世界が因果に規定せられ、生死轉變極りなきに反して、如來の本土は不生不滅永恆常然なり。

涅槃經に曰く、解脱とは(虛)無即如來なり。如來は(虛)無、作所作にあらず。眞解脱とは不生不滅なり。是の故に解脱は如來なり。不生不滅、不老不死、不破不壞にして、有爲の法にあらず。之を如來入大涅槃と云ふ。又解脱とは無上と名づく。阿耨菩提を得し已つて無愛無癡即解脱なり。又如來とは即是涅槃、涅槃とは即無盡無盡は即是佛性、佛性は即是決定、決定は即是阿耨菩提。又如來者即是無爲、無爲者即是常、常者即法、又曰く、道に二種あり、一者常、二者無常。涅槃亦爾り。外道及凡夫聲聞等の道を無常とす。諸佛菩薩所有の菩提を常と爲す。善男子菩提と涅槃とは悉く名けて常と爲す。一切衆生は無量煩惱の爲に覆はれて、慧眼なきが故に見ること能はず。諸の衆生戒定慧を修して、修行の故に道と菩提と及涅槃とを見る。是を菩薩が菩提涅槃を得ると名づく。道の性相實に生滅せず。道は色像の見つべきなしと雖も、而も實に用あり。衆生心も見るべからざるも亦有なるが如し。又曰く、大樂あるが故に大涅槃と名づく。涅槃の性無苦無樂の故に大樂と云ふ。凡夫の樂は無常敗壞、是故無樂。諸佛常樂、無有變易、故名大樂。二者、大寂靜の故に、名爲大樂。涅槃の性は寂靜、一切煩惱の法を遠離するが故に。三者、一切智の故に大樂と名づく。一切智にあらず

るは大樂と名けず。四者、身不壞故、名づけて大樂と爲す。身若し壞すべくんば樂と名けず。如來の身は金剛不壞。煩惱身無常身に非ず故に大涅槃と名く。

又曰く、第一義諦を亦道と名づく、亦菩提と名づく、又涅槃と名づく。又云、法身は即是常樂我淨なり。若しは佛出世及不出世にも、常住不動にして、變易あることなし。

涅槃は不生不滅なりと云ふも、單に凝固無生の非活動の體なりと云ふにあらず。

密嚴淨土

如來の眞佛土涅槃界を神秘的に密嚴淨土と名づく。眞佛身土をば自然界を超絶したる彼岸に求むべからず。宇宙全體物心二界を總合して即ち是れ金胎不二の大日覺王の體なり。

六大を佛體とし、四曼を相とす。三密を用とす。六大の中に於て、地水火風空の五大は理體にして胎藏界、識大は智にして金剛界とす。六大合して理智一如の大日如來。宇宙萬有六大を離れず、六大は諸法に周徧の故に、一切法として大日に非ざるはなし。理智共に法界に周徧し、理胎藏に四重聖衆、智金剛界に三十七尊、兩部本來不二なり。大日心王の覺體、塵數の諸聖は心數の眷屬、五智所成の依正二報、本有金剛界（體性智）自在三摩耶（妙觀察智）大曼陀羅より現諸法不生（平等性智）大菩提心（大圓鏡智）不壞金剛光明心殿（成所作智）不壞金剛諸尊常住身を噴する光明心（心の覺體を噴する）殿所住。

三十七尊九會曼陀、十三大會、四重曼荼、重々帝網、塵刹聖衆（正報）、依正無盡、自在圓滿。

此の教によれば、宇宙は本是れ密嚴淨土一切諸法として覺王境界ならざるはなし。一切衆生萬德具備して衆生として毘盧ならざるはなし。

表徳門には十心諸法平等にして、是大日の表現の故に、一塵も捨つべきなし、皆是

れ毘盧。一切萬法悉く大日。眞如即我身、佛法即我體

宇宙萬有悉く毘盧表徳、衆生悉く本有の薩埵なれども、衆生無明に覆はれて自ら覺知せず、宇宙は深秘の蓮華藏界なれども、衆生は煩惱に覆はれて覺知すること能はず。故に密嚴と云ふ。若し三密相應の寶輪を以て神秘の門を開くときは、法界本來是れ大日の表徳たるを知らん。宇宙實相たる大日を觀んと欲せば、他に求むべからず、自己心靈開發すべし。然る時は永恆本然の大日輪は恒沙無邊の萬德を具して、永しなへに自己内在の法界を照すを見ん。

大日の淨土の中に在りて、凡夫は生死の閻宅を認め、衆生生死界中に在りて、如來は密嚴淨土に安住し給ふ。

汎神論は、吾人は神の一分子また神の一模塑なりとす。神は宇宙全體の人格的存在とし、之を人格に擬す。人の精神の最高要素とし、人間の精神を極大とし、神を寫象す。さればとて無限なる神と有限なる人と全然同一なりと云ふにあらず。

金胎五智等を以て表號的に人格に擬したる神の觀念に外ならず。かゝる表號的擬人論は宗教には避くべからざる事なり。

顯教は、學理的に宇宙全一の精神を認め、智によりて即ち推理によりて、全一の觀念に達して、神は全一の精神ならざるべからずとするも、云はゞ理に於てまた觀念に於て、之を知るも、全く如來の内容との融合は、神秘的瑜伽の密法によらざるべからず。即ち内容が三密相應し、入我々入、神秘的加持によりて、生ける大我と融合し、活ける靈として生活するに至る。

眞如遠からず此の身を捨て何の處にか求めん。如實に自心を知れば即自己の心靈大日尊、即法界周徧の體、即ち密嚴世界なり。

宇宙は本大日の表徳たるも、衆生は無明に覆はれて、如來の自性と相應せざるが故に、自ら生死に迷没す。宇宙は本大日なれども、迷へる衆生の爲めには如來の自性は超越的なり。汎神論は如來の自中存在にして、而も超越的なり。如來は無限に絶對無

規定。世界は相對規定なり。自然界は如來の中に没入す。如來は世界に没入すべきに非ず。故に自然界は生滅變易、眞善なるものにあらず。吾人は如來を離れし心性にあらざる故に神の顯現なりと。

吾人は生滅變易を見るも、如來は本有永恒の大日如來なり。生滅變易は遊遊三味の所作なり。

如來の妙觀察智と之と相應せる神秘的宗教とによりて、如來の本體を觀じたるものとす。

重々無礙蓮華藏世界

華嚴經の涅槃及佛身。

如來は十佛自境界。

十身如來、重々無盡、蓮華藏界に住す。

宇宙萬有を總合して之を佛身とし、之を融三世間の十身とす。衆生身、國土身、業報身、聲聞身、獨覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身これなり。

衆生と國土と業報との三は衆生の業感、これを染分とし、聲聞と獨覺と菩薩と如來智法の六を淨分とし、虚空は圓融無碍の身。

本來萬有即如來の自體なれども、衆生は自ら迷ひて之を知らず。又菩薩身等の十身如來身を、更に十種に分ちて、十身十佛とす。菩薩、願、加持、化、意生、威勢、相好、福德、智、法、これを十身と云ふ。成正覺、願、住持、涅槃佛、隨樂、心、業報、三昧、本性、法界之を十佛と云ふ。十身を三身に配當すべし。

十佛を立て無盡を顯はす。

宇宙全體本如來本體、之を二面とし、一方は因分、普賢境界、法界緣起、乃至自在無窮、法界體性、本來自爾、緣起無窮、始終を離れ、諸法の體性、衆善の朝宗、萬徳の歸所なる甚深法界、是如來の重々無盡、圓融無碍の活動せる方面にて、一面は果分、

唯佛自境界、果分内證圓融、相即相入、圓融無碍、是如來本質自性、如來自ら證入し給ふ所、即自受用身と相應す。是絕對無規定即ち超絶體なり。

因分一切無盡の活動、果分自中存在。

如來は一方には本然自存毘盧、一面には無始無終に宇宙萬有に在て活動す。

蓮華藏界、如來遍法界身、一面より觀すれば種々雜多なる世界塵數刹海なり。一方よりみれば圓融無碍、究竟果分國土海、十佛自體、絕對無碍。理事無碍、體と力と相即相入し、一々塵々法界に徧し、一塵一切塵刹と相即相入し、一切塵々重々無盡、其狀相説くべからず。一塵稱法界なれば、一塵に盡法界の塵刹を相容し、相即門には、一即一切、一切即一、舉一全收、法性圓融故、因果相即、生佛一如、生に即して佛、初發心時便成正覺。相即門には、十方無盡の依正色心は一塵に相容し、一に多を容れ、多に一を容れ、乃至重々無盡の用をなす。

時間的には三世際を以て一念に相入し、一念即無量劫。一方に無限の時間と、一面には非時間的同時態。十佛如來自境界は絕對永恒心靈態、言語道斷、如來自證。

一方には塵數の相好身を以て重々無盡の刹海に於て當然に說法度生無盡。

經に、一佛土を十方界に滿、十方を一に入、亦無餘、世界本相不壞。又曰く於一微塵中、現無量佛國。又一毛孔皆有無量菩薩、各爲具說、普賢行願。又云、一微塵所示現、一切微塵亦如是。

本經に説く處の佛身及佛土論は、宇宙心王如來を佛眼を以て觀じたる相なり。また佛身を妙觀察智を正面として觀する相なり。

涅槃及佛身論

涅槃とは、眞如緣起論には、始覺の智極りて本覺と一致したる處、生滅の相と根本無明を滅盡し、眞如全體顯現したる處。

如來は絕對心靈、大智慧光明の相、恒沙無盡の性徳を具して、また不可思議の業用

を現じて、十方三世に衆生を度す。

真如の體は絶對なれども、衆生の心に應じて佛陀報應二身を示し、涅槃は無明煩惱の滅盡して、真如の實際に復したる處、佛性は真如の用をもて法報應の三身と。

二四

追慕

菱田隆道

二六

御逸事

行誠上人の書翰

昔者牟尼世尊。降三道寶階。還御閻浮。有羅漢尼。自傷見佛後于人變身。爲轉輪聖王。謂得第一尊者須菩提。禪坐石窟。修空三昧。

佛曰。今日我見須菩提。居第一榮長老頃居亡師之喪。獨坐念佛。至孝々々。道莫大焉。予適來三松戸里。今日而物憶。以長老爲第一謁見之人。百千羣庶不足言耳。時惟秋風。爲道自愛。菓函欽領。勿々不宣。

八月廿九日

三綠山老納

辨榮長老

二五

故上人御在世中の御化導に關せる事に付、今より二十餘年前當地五條坂袋中庵に於て不圖御説法の會座に列なりしことありしを思ひ出し、小僧時代より實懇の間柄に付過日同庵へ參り、當時の模様を相尋ね、尙詳細書面にて返事を頼み置候處、別紙を送り被吳候に付何かの御參考にと存じ、其儘御覽に入置候就ては本日早朝恒村氏其他の篤信家同伴同庵へ參詣し、故上人の御遺品を拜觀し、現住より御滞在の奥座敷に於て奇瑞現はれ御自筆の釋尊御畫像より光明を放ち給ひし等の實感を物語られ、且つ現住が靈感を得られしこと々も談され、是れ全く故上人の賜なりとて喜び被居候。斯の奇瑞等は他日筆記致し御覽に入れると申被居候。何れ恒村様より詳しく可被申上事と存候へ共不取敢別紙御送り申上候。小生は去る廿八年印度より御歸朝の砌、同庵にて始めて壹席の御説法を拜聽仕候。其れは五蘊假和合の中に人我無しと云意味の御話なりし。當時は只志操の堅實なる豪らき行者様で在ると思ひ、別段難有き上人様とは感ぜざりし、其後十數年を経て祖山に於て宗祖の皮髓の御講演を拜聽し難有き御方なりと思ひ居りしのみ、四五年前十二光佛の御講演を承り難有きを増し候へ共、未だ元祖の再來と迄は信ぜざりし。然るに昨大正九年七月廿六日黒谷山内瑞泉院へ、光明會員が御請待申上られ念佛三昧會を修行されし際、不圖參詣し有難き身に沁み騰神踊躍入西方の御説法に感激し、直ちに光明會に加入し爾來忘り勝に候へ共、淨業清修に努力能は候。思へば故上人の溫容に接せし(昨年七月)以來短日月之間上人より受けし深き印象は永久に小生の心より離れる時無之候。大正の聖法然非滅に滅を示し給ひて常に私の爲に無言の大説法を賜はりつゝ、あり日夜其恩寵を感謝仕居候先は右迄 勿々敬具

大正十年三月極日

二七

追慕

岩佐祐吉

私の祖母は深く上人に歸依致しまして、死ぬ時には「佛様が眼前へおむかへに見えた」等と申せし如くでした。で生前、老後のつれづれに村の子供達を集めて、常に上人から法を聞かせむと努めて居りました。上人は子供達にも常に「方便」と云ふことを云はれ、手づからハンドオーガンをひいて、自作の曲にて佛教唱歌を教へられました。樂しく集つて歌ひ且つ教を受けた子供達は、大變幸福だったのでした。然し子供達に理解出来る様、佛を説かれるのはゑらかつたことと思はれます。子供達は佛様とはこの人かと思つた様に皆々上人を禮拜致しました。そうした會合の後等に、彼等と共に田舎道を散歩される時等は、青い野菜畑等を殊に賛美せられ、「此等はすべて佛様が作られたのです」と、創造の美を聞かされ、「向ふの西の山(伊吹山)上の雲に今私の心は遊んで居るのです」と想像の哲理を教へられたのです。只不斷的念佛はたとひ浴場に在られても、上人の呼吸が念佛となつて出て參つた様に思はれます。子供達は今は大抵父となり、母となつて家庭を營んで四散して、今再會は望みも得られませぬと、折にふれ、時につれて、彼の徳高かりし上人を、なつかしく追想して居ることでせう。私も勿論當時の子供の一人でした。

上人と祖母、そうして私と、かう次第に思ひつかはれる時、何だかミステイカルな糸の連鎖が私の頭中を、みたします。私の父は、今は死して數年になりますが、上人に願つて佛畫を澤山書いて預きましたが、多くの村人達の中には、之れを聞き知り吾も吾もと願出で、上人の來車さる、度には、口尙ほ足らぬと云ふ有様でした。私の爲と云ふて特に書いて下された額が宅にあります。「研精不倦」と云ふ文字です。恐らく私の一生の指針でございませう。

私の父が、かつて上人に乞ふて私方で佛教講座を聞いたことがございます。門前市をなして、村人はめづらしい上人のお説非聽と出かけて來ました。當時は殊更に低級な人が多くて、本願寺僧等の如く節つきでなくてはのみ込み悪い」等と批評したものでした。それで父は理解ある村の有力者有志のみを招いで、非聽することゝしたのでした。上人もその方を喜ばれたやうでした。一人減じ二人減するのを見て上人は、「人形をして代らしめて己れ一人真心がら教を受けた」かの人の話など昔語りをさるゝ折なども多かつたのです。なか／＼アイロニーもやられたやうで、今から面白くも想ひます。

思ひ出

高井善成

想ひ出せば、聖人が始めて當地へ御來錫になつたのは、明治三十一年頃だと思ふ。尾張佐屋の方面から、一人の僧侶が紹介に見えて、續いて御出になつた様に思ふ。其時の隨行は宮川如々居士であつた。

聖人は常に米粒名號と阿彌陀經等を施與せられ、或は子供を集めて訓讀を教へ玉ひ、書畫の需に應じて結縁せしめ給ふた。宗内寺院は云ふに及ばず、或は禪宗に、或は西山に、或は富豪と各方面から御請待があり、遠近風を望んで歸仰する有様であつた。四日市方面から愛知岐阜縣下を御巡錫の際は、私の法兄正道師も隨行さして貰ふた。私は其頃名古屋の學校にあつたが、聖人の御來錫があつて一場の講演を非聽したことがある。明治三十三年二月私の寺では、聖人の五重相傳會が營まれた。明治三十五年私は東京小石川の學院に學ぶことゝなつたが、信者の五井みき子刀白から自製の如法衣を上人に進上申したいと云ふので、私が預り淺草の誓願寺へ御届したことがある。當時聖人は鎌倉の方に御出になつたが、其の御禮狀のハガキに光と云ふ一文を書いて頂いた。御遺文中の「光」は其れである。

明治三十七年頃淺草の正定寺で、石塚龍學師などが聖人を中心に、信仰坐談會を催

された。其の席に列つたことがあつたが、其後誰云ふとなく聖人は異流であると云ふので、何時の間にか遠ざかつて終つた。

明治四十二年私は専門科を出て、再び名古屋の學校に入り、又轉じて東京宗務の方へ參りましたが、聖人に接する機會は無かつた。

大正元年歸國して住職することとなり、大正三年五重相傳會を修行したが、偶々信者の勸むるまゝに其の頃から、再び聖人の御來錫を乞ふに至つた。其の間十三年間も桑名へは御來教がなかつた。大正六年頃迄毎年二三回宛御巡教御指導下さいました。

其の前後四日市、神戸、龜山、津、松阪、柿野方面迄御巡錫があり、大正五年には伊勢教區の講習會に御來演下さいました。而して接する毎に聖人の御人格には皆敬慕せざるものなく、信服せないものは有りませんでした。

或時、當桑名に於て新聞社を興さんとする某法學士が、聖人を訪れたことがある。其の時聖人は書院に於て米粒に名號を書きながら「今の人は活きんとすることを知つて活されて居ると云ふことを知らぬ」と懇々御話がありました。

又大正六年の夏であつたと思ふ。同じ書院に於て大經下卷の御講話があつた。其の席に列なつた伊藤まつ子刀自は、此の良縁に逢ふことを涙を流して、且つ喜び、且つ告白せられた。一同が歸つて後聖人は「伊藤さんは難有いと涙を流して喜ばれるが、吾々は難有くても涙を流するに至らぬ」と云ふて笑ひながら仰せられたことがある。

名古屋の伊藤萬吉氏は元桑名の人で、五重以來の熱心なる歸依者であるが、上人御來錫毎に多くの知人を勧誘し、或は小學校に或は眞宗の寺に、郵便局に或は女學校に、聖人を御紹介せられて結縁をなさつた。就中女學校に於て五倫と五戒に就ての御講演は、實に有益なものであつた。今から思ふと其の當時の御講演を筆記して置いたならばと非常に残念に思ふ。

又朝鮮御巡錫中であつた。朝鮮開教區は到る所亡者追善を事として居る。それとなく靈性向上の一路を缺いて居ると云ふ様な、御指導の御消息を頂戴したことがある。

其の御歸錫の時であつた、鮮人李仁鐸が隨行をして來られた。李氏よく日本語で演説した。

又智恩院勢至堂に於て念佛三昧會御修行の際には、ハガキに紅葉を染めて、阿彌陀佛に染むるこゝろの色に出ては

秋の梢のたくひならまし

の歌を書いて頂戴いたしました。心を染むべく第三回の別時の時、私も參加いたしました。其の時始めて淺井上人にも御目に掛つた。其の後間もなく淺井上人は御遷化せられた。今尙残念に思ふて止まない。

大正九年の春であつた。四日市馳出の金剛寺へ五重相傳に御來錫下された。これが此地方に於ける最後の御化導であつたと思ふ。其年の十二月遂にあの雪深き北國に於て御遷化遊ばされたのである。何と云ふ悲しき事であらう。聖人には未だ十年も廿年も衆生濟度の爲めに御在世下ること、信じ切つて居つたのに、今更の如く驚かざるを得ない。然しながら御遷化以來毎月出版の御遺文が今尙續いて盡きない。あの御多忙な寧日なき御化導の中に、どうして此の御遺文が出来て居つたことであらう。凡人でないことは云ふまでもないが、愈々益々聖人御高德の程を敬慕して止まない次第である。眞に今から思へば御在世中は餘り心安きになれて、御無禮なことも多く尊信常に厚からざりしを深く慚愧すると共に、倦むことなくして如何なる場合にも麗はしきを變へ玉はず、如何なる人に接しても懇ろに御指導下されしことを感泣して止まない次第である。

月に日にひろがりてゆく山崎の流れのすゑははてもしられず

追慕

五井みき

想出せば、明治三十一年頃でしたか、桑名光徳寺へ始めて辨榮上人が御來錫になつ

た際、切なる先住様のお勧めで参詣を致しました。元より私は真宗の信仰で浄土宗の家へ嫁したのであるけれども、毛嫌ひして今次の説教は参詣致しませんでした。今度のお上人は實に稀なる大徳で、印度佛蹟を御参拜になり、一切經をお讀みなされ、米粒名號、阿彌陀經等を御施興になると云ふので、其れはく、澤山に参詣せられました。其時お上人は本堂へお出ましになりましたが、どう云ふ不思議か、私は其のお姿を拜見するなり丁度善導大師がお出ましになつた様な感じが致しました。

高座の下に坐を占めて、聴聞を致しましたが、御話が終つてから、お上人が今高座の下に居た婦人は誰であるか、是非面會しようと思つたので、其れが因縁となり始めてお目に掛り、今日に至るまで色々御育て下さいました。

私は今迄多くの知識にも逢ひましたが、お上人の様な御方は、又と再び難有き大徳であると思ひます。お上人は仰せになりました。知識は月を指す指である。月さへ見れば指に要はないが、兎角月を忘れて指に眼をつける、指よりは月に眼をつけねばならぬ」と云ふて三昧佛を書いて頂きました。

或夜の夢でした。私は常の如く如来様の前でお勤めして居りますと、女中が只今法然上人様がお越しになりましたと取次で参りました。私は今迄お法ばかりを頂いて喜んで居りましたが、生身の法然様が御出になるとは、これはくと思ひまして表坐敷へ御案内申せと云ひ付けました。其れから直に襖をあけて御挨拶申上げやうと、フトお見上げ申しますと、辨榮聖人が北から南向に全紙をのべて、お前さんに大キナ如来様を書いて上げると仰せられました。法然上人と思ふたのが辨榮上人でありました。さればと云ふて法然上人と辨榮上人と、其處に何等お二人の區別が毛頭ある様に感じませんでした。心から一體の感にうたれて御禮申上げ、喜びの涙にむせぶと見てフト夢がさめました。

其の外種々不思議な感想もありますが、お上人には事につけ、物に觸れて一々御親切におさとし下さいまして、常に私を愛子の如く御育て下さいました。お上人の五重

相傳にも付けさして貰ひまして、愈々浄土宗の難有いことも分り、此世から彼の世かけての尊く上なき光明主義の信仰は、實に難有き極みであります。斯る結構なるみ教が又と世に有らじかと思ひます。せめてもの感謝報恩の爲めと思ひつきまして、愚かながらも自分の細の紋付を木欄に染めまして、一針一唱の積りで二十五條のお袈裟を作り、先づ手引して頂いた先住様に進上致しました。其れから紗の紋付を木欄にそめて七條衣を作り、お聖人へタトヒ三日丈でも、お掛けを願ひたいと思ふて、當時東京にお出になつた今の方丈様にお届をして貰つた様な次第であります。

此等のことは、ホンの私の思ひでの一端、昔語りにすぎませぬ。今日にては只一筋に念佛さして頂いて居ります。日々喜びの中に日暮しをさして頂いて居ります。お話しするのにも實に難有い次第であります。南無阿彌陀佛

昭和三年二月廿八日印刷

同 廿九日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵税共)

年拾貳冊 貳圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨 成

發行人

東京市小石川區若荷谷町九八

印刷人 小林七太郎

電話小石川一四九五

發行所

東京市小石川區水道橋二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番